

巻頭言

特集号「石油ピークと変革」



NPO 法人もったいない学会 WEB 学会誌編集委員長、大久保泰邦

2008年3月27日、東京大学山上会館において、第4回もったいない学会シンポジウム「石油ピークと変革」が開催された。本特集号はこの時の講演の内容をまとめたものである。

原油価格の上昇は止まらない。今後ももっと上がる。各国がエネルギー争奪戦を行うシナリオと国際協調がなされるシナリオの二つが考えられるが、前者に向かう可能性が強い。マスコミの石油ピークとその影響の認識は低く、国民にその実態が正しく伝わっていない。どちらかと言えば温暖化ばかり騒いでいる。しかし、困るのは、弱いところである。地方が困るのである。

石井会長から、世の中を変えるために、もったいない学会はどうすべきか考えようと提案が出された。理事と有志はその提案に応じ、2007年12月18日と2008年1月22日、2度にわたり座談会を開催し、この件について議論した。そのうち1回目の内容を以下のホームページに掲載した。

http://www.mottainaisociety.org/archive/pass_pdf/round-table_talk_01.pdf

石油ピークへの対策はすでにいくつかの国で戦略的に開始されている。しかし、日本においては石油ピークについてほとんど知られていない。石油ピークへの対策は、社会の変革が必要であるが、このまま変わらなければ日本は崩壊の危機に直面する。石油ピークの意味を国民一人一人に理解してもらい、その上で対策を考えたい。このような議論が座談会で交わされた。

芦田副会長は、日本工学アカデミー環境エネルギー研究会元代表でもあるが、この件は重要であることから、日本工学アカデミーとの共催でシンポジウムを開催することを提案され、3月27日に開催されるはこびとなった。

そのシンポジウムでは、座談会の議論を踏まえ、石油ピークのリスクの大きさ、予期の重要さの理解、いつ起こるかを感知するための情報、具体的な解決策、解決策の実施、について議論した。本特集号は、これに沿って、リスクの大きさの理解に関しては「石油ピーク後の世界」（大久保泰邦）、予期に関しては「地球は有限－石油ピークと温暖化－」（石井吉徳）、感知に関しては「『石油供給不足は目の前か？』－石油供給不足懸念に関する最新情報より－」（中田雅彦）、解決策に関し

では「持続可能・地方分散型社会構築の実現に向けて」（芦田譲）、その実施に関しては「滋賀をモデルに“もったいない社会”のビジョンを描く」（金再奎、岩川貴志、佐藤祐一、内藤正明）にまとめた。

石油ピークに向けて世の中を変えていく必要があるが、本特集号がその一助となることを期待する。

参考のため、2008年3月27日のシンポジウムのプログラムを付す。

地球は有限－石油ピークと温暖化－

石井 吉徳

「地球は有限」、この当たり前のことを理解すれば、石油ピークは気候変動よりも緊急な課題であることが理解できる。

石油供給不足懸念に関する最新情報

中田 雅彦

日本人は多少価格が高くなっても石油はまだ自由に使い続けられると錯覚している。しかし欧米ではすでに公的機関から大手の石油会社まで、10年以内に石油供給不足が発生する可能性が高いことを指摘している。マスコミも取り上げ、備えが必要なことを訴え初めている。最新のデータは石油供給の現実を語る。

石油ピーク後の世界

大久保 泰邦

現在、物価の高騰、株価の暴落が起きている。これは石油価格の高騰も一つの原因と言われている。データは石油ピークが近づいていることを示しており、石油価格の高騰は恒常的なものと考えべきである。これが我々にどのように影響するかシミュレーションする。

地域からの持続可能社会の発信～滋賀をモデルに”もったいない社会”の具体像を描く

内藤 正明

石油ピークは、物価高騰、輸送用燃料不足など社会に与える影響は計り知れない。石油をほとんど使わない方法として、結局自然とともに生きることも一つの解答になる。

持続可能・地方分散型社会構築の実現に向けて

芦田 譲

石油をほとんど使わない例は、世界にたくさんある。地方は都市に比べ石油を使わない。こう考えると、地方から変革が生まれるはずである。

総合討論

謝辞：本特集号の原稿作成にあたり、広瀬一豊氏に多大なご協力を頂いた。ここに感謝の意を表す。